主日礼拝説教「あなたが選ばれる理由」予稿

日本基督教団石神井教会　2025年11月23日

【旧約聖書日課】サムエル記上　16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、
イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツ
レヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見
いだした。」2サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けば
わたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをさ
さげるために来ました』と言い、3いけにえをささげるときになったら、エッサイを招き
なさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者
に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着く
と、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのため
でしょうか。」5「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、い
けにえの会食に一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。
6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者
だ、と思った。7しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。
わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心に
よって見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言
った。「この者をも主はお選びにならない。」9エッサイは次に、シャンマを通らせた。
サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子にサ
ムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」
11サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残って
いますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人を
やって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きませ
ん。」12エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、
姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」13
サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の
霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

【福音書日課】マルコによる福音書　10章17～31節

17イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い
先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18イエスは言われた。「な
ぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。19『殺
すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは
知っているはずだ。」20すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守って

きました」と言った。21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

23イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」24弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。25金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。27イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」28ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。29イエスは言われた。「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、30今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。31しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

神に感謝するとき【こども説教のために】

教会のカレンダー（教会暦）では、一年一巡り最後の日曜日を「終末主日」と呼びます。「終末」とは、「世の終わりの日」のことです。それがどのような日として訪れるのか、わたしたちには分かりませんが、その日に神がすべてのことを完成させてくださって、わたしたち一人ひとりをキリストの栄光の中に引き上げてくださると信じて、記念するのです。

この同じ日を、わたしたちの属する「日本基督教団」では「収穫感謝日」とも呼びます。何よりも、特に秋の季節に与えられる大地の実りを、神に与えていただいた恵みとして感謝します。今年も、わたしたちの教会の仲間で農園をされている方が収穫された柿をたくさん献げてくださいました。神が恵みとして与えてくださった大地の実りを、わたしたちは、皆で分かち合う喜びをも与えられています。

柿の木には、甘柿と渋柿があります。甘柿はいつまでも甘柿、渋柿はいつまでも渋柿です。でも、渋柿の木に甘柿の枝を接木すると、甘柿の実を結ぶようになります。農家では、そうして甘柿を生産するのです。

わたしたち一人ひとりは、甘柿として生まれた者もあれば、渋柿として生まれた者もあるかもしれません。渋柿も役に立ちますが、甘柿として実を結ばせようと、神がお選びくださることもあるのです。渋柿として生まれた者に、甘柿を接いでくださるのです。主イエスとつないでくださるのです。主イエスに従う者たちとつないでくださるのです。

選ばれたとき

わたしたちの教会は、今日一日を「オープンチャーチ」としてご案内してきました。礼拝後には、いくつかのイベントも準備しています。その中には、地域の団体の出店も含まれています。教会が「開かれたところ」であるということは、ただ来客としてどなたのことも歓迎するというだけでなく、主体的に関わっていただける場としてお迎えするということも含まれるのです。

もちろん、教会は、いつでも「オープンチャーチ」なのです。いつでも、どなたに対しても「開かれたところ」です。とは言え、そこにひとり飛び込んで来るのは、なかなか難しいことです。そもそも、教会がどのようなところか分からなければ、安心して飛び込むことはできないでしょう。ですから、「オープンチャーチ」の一日が、少しばかりわたしたちの教会の様子を知っていただく機会になればと願っています。

わたしたちの人生には、小さな出会い、小さな経験から、大きな道が方向づけられるということがあります。それは、もしかすると忘れてしまっても当然のような小さなことであったかもしれません。そのときには、自分では些細なことにしか思えないことであったかもしれません。ところが、後から振り返ってみたときに、あの小さなことが、その後の自分の人生を大きく変えた出来事であったのだと、気づかされることがあるのです。

旧約聖書日課（サムエル記）は、一人の少年の身に起こった思いがけない小さな出来事を物語っていました。「ダビデ」という少年です。七人の兄たちがあり、末の息子ダビデは、まだ一家の大事に同席させてもらえないような年端でした。その日も、父エッサイは、大事な客人を迎えるために兄息子たちを家に集めていましたが、ダビデだけは、羊の番をさせられていたのです。

客人の名は、「サムエル」といいました。その地で「サムエル」の名を知らない者はいません。何となれば、イスラエルの諸部族を束ねる王として「サウル」を即位させたのが、ほかならぬサムエルだったのです。預言者とも士師とも見られていたサムエルは、王のような権力者ではありませんでしたが、権威ある者として、世の政治をも動かす存在だったのです。その彼が町を訪ねて来ることだけでも、大事件でした。ダビデの父エッサイは、その大人物を迎える大役を負っていたのです。けれども、ダビデだけは、そこに招かれていませんでした。年端の行かない少年は、その場にふさわしくないとみなされたのでしょう。

ところが、サムエルは、その少年を呼び寄せたのです。野で羊の番をしていたダビデは、家の中に呼び入れられ、サムエルと対面しました。そして、彼から油注ぎの儀式を受けたのです。その意味をダビデが知るようになったのは、ずっと後のことでしょう。しかし、そこからすべては始まったのです。

ゼロからの足し算

ダビデは、後に王となります。王家の生まれではありませんが、王として立てられました。初めは、自分たちの部族であるユダ族の王として、次いで、サウルの王家が支配していたイスラエル諸部族の王として。

それは、もちろん、彼が王となるにふさわしい人物だと人々が認めたからでしょう。彼は、優れた軍人でした。若いころはサウル王の臣下として武勲を上げました。サウル王に敵とみなされるようになってからも、わずかな側近と共に軍人として生き残る術を身に着けていたのです。しかも、ダビデは、自分の命を狙うようになったサウル王に敵対することを避け続けたと言います。「**主が油を注がれた方に、わたしが手をかけることを主は決してお許しにならない**」（サム上 26:11）というのです。偉大な王と見られていたサウル王が戦死した後、混乱したユダとイスラエルの諸部族の間で、自分たちを一つにまとめてくれるのはダビデしかいないと見られるようになったのは、必然だったのかもしれません。

ダビデは、『聖書』の中で理想の王とみなされています。「列王記」が歴代の王たちを評価するとき、その基準は常に「ダビデ」に置かれています。「**ダビデが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく**」（王下 18:3 など）行ったか、というのです。とは言え、「サムエル記」の伝えるダビデは、決して完全無欠の聖人君子のような人物ではありません。女性関係で過ちを犯し、息子たちとの関係でも悩み多い人生を送ったのです。多くの者を傷つけ、それによって自分自身、心に多くの傷を負った人でした。

ただ、ダビデは、その人生の日々を、少年時代に経験した一つの出会いから始まったこととして理解したのでしょう。サムエルとの出会いです。サムエルに油を注がれた経験です。まだ何者でもなかった、父の羊の世話をするだけの少年に「**主が油を注がれた**」という経験です。

主イエスのもとを訪ねた一人の男は、何でも持っていました。正しい行い、十分な財産、守るべき家族。それでも、何かが欠けていると感じていました。それを尋ねました。主イエスの答えは、彼を気落ちさせ、悲しませました。財産を売り払い、人々に施し、主イエスに従いなさい、ということだったからです。それは、彼には難しい要求でした。誰にとっても、難しい要求でした。何かを捨てることは、誰にとっても難しいことです。けれども、主イエスは言われます、「**神にはできる**」と。捨てることが目標なのではありません。わたしたちが何も持たなくても、神はお与えくださると知ることを、主イエスはお教えなのです。

今日、自分の手を空にするときを与えられました。その手に、神の恵みを受け取るときです。これは小さなことです。しかし、大きな一歩なのです。